第３海兵遠征軍

常に即応態勢にある部隊

在日米海兵隊基地

第３海兵遠征軍

キャンプ・コートニーの司令部を拠点に、海兵隊中将が指揮を執る第３海兵遠征軍は、日米安全保障条約及びアジア太平洋地域における同盟関係を支持しつつ、日本で前方駐留態勢を維持することを任務とする。

第３海兵遠征軍は、海兵空陸任務部隊として編成されている。海兵空陸任務部隊に指定されるのは、派遣可能な部隊を編成するための基本的な枠組みを有するためである。「海兵遠征軍」は海兵空陸任務部隊の中でも最大規模である。海兵空陸任務部隊の規模や構造は任務によって決定され、これによって海兵隊部隊はどんな危機にも対応可能な柔軟性を持つ。この柔軟性は、海兵空陸任務部隊が「常に即応態勢にある部隊」として存在し続けるために不可欠である。海兵空陸任務部隊の規模は、海兵隊員並びに海軍兵ら数百人から、数千人に及ぶまで様々である。

それぞれの海兵空陸任務部隊は司令部部隊、陸上戦闘部隊、航空戦闘部隊、兵站戦闘部隊で編成される。

第３海兵遠征軍の陸上戦闘部隊は第３海兵師団、航空戦闘部隊は第１海兵航空団、兵站戦闘部隊は第３海兵兵站群である。

第３海兵遠征軍の大部分は沖縄に駐留している。　約１８，０００人近くの海兵隊員及び海軍兵が、10箇所の基地や飛行場に配備されている。また、３，２００人以上の海兵隊員及び海軍兵が日本本土に位置する岩国飛行場に配備されている。

加えて、米国ハワイ州に配備されている、主に第３海兵師団所属の海兵隊員及び海軍兵約５，０００人以上も第３海兵遠征軍の強力な戦闘能力の一部である。

第３海兵遠征軍は日本をはじめ、タイ、フィリピン、韓国、オーストラリアなど、アジア太平洋地域の国々と、年間７０以上の二国間及び多国間訓練・演習を実施している。これら訓練・演習を通じ、地域の強固な同盟と軍同士の交流を発展、維持させることが可能である。第３海兵遠征軍はこれらの訓練・演習を通し、大規模な戦闘作戦から人道支援・災害救助活動まで様々な作戦の実施の態勢を整えることができる。

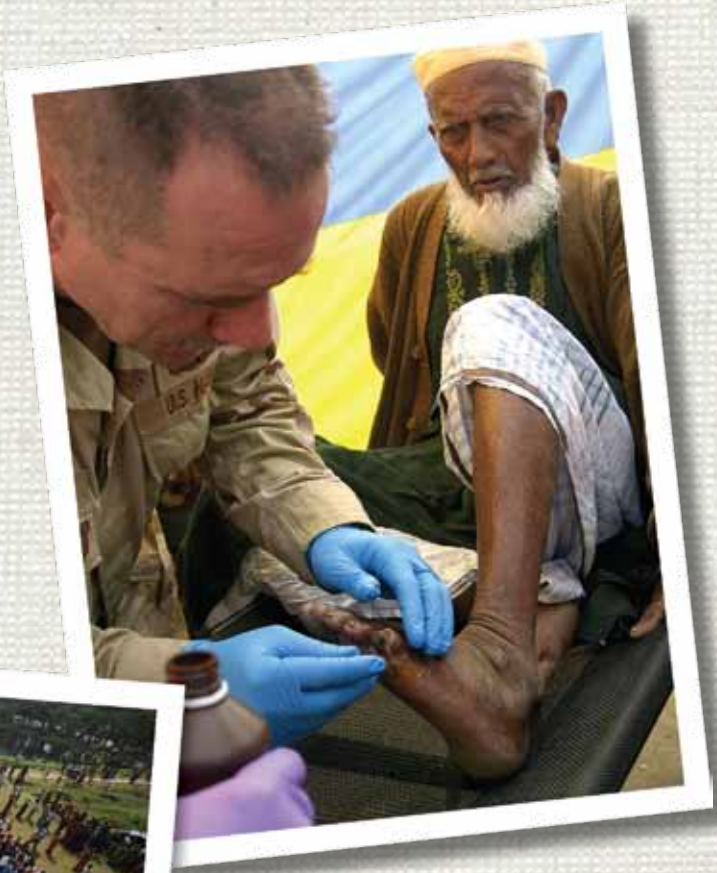
第３海兵遠征軍は、アジア地域における下記の人道支援・災害救援活動で重要な役割を果たした。

・２００４年１１月、フィリピン台風災害
・２００４年１２月-２００５年３月、スマトラ沖地震災害
・２００５年１０月-２００６年５月、パキスタン地震災害
・２００６年３月-４月、フィリピン地滑り災害
・２００６年５月-６月、インドネシア・ジャワ島中部地震災害
・２００７年１１月、バングラデシュ・サイクロン災害
・２００９年８月、台湾台風８号災害

第３海兵遠征軍の海兵隊員らは、訓練を行う沖縄をはじめアジア太平洋地域において、地元コミュニティーの一員として、多くの地域渉外活動や行なったり、民間援助プログラムを主催している。例えば、インドネシアやフィリピンにおいて医療及び歯科医療の拠点を無料で提供したり、韓国では孤児院の施設修理を支援、タイでは学校の新校舎を建設したり、日本では英語をボランティアで教えたりなどの活動を行っている。

第3海兵遠征旅団

海兵遠征軍副司令官が指揮を執る第３海兵遠征旅団は第３海兵遠征軍内部に組み込まれた組織である。旅団は、１個増強歩兵連隊で構成する陸上戦闘部隊、１個航空混成群で構成する航空戦闘部隊、１個兵站戦闘連隊で構成する兵站戦闘部隊で組織。海上事前集積中隊と結合することにより、海兵遠征軍レベルに拡大することや、統合任務部隊司令部の中核を形成することが可能である。アジア太平洋地域において、ある一つの任務が、大規模な海兵空陸任務部隊を要求するものの、第３海兵遠征軍の全兵力までは必要としないという場合には、第３海兵旅団が派遣される。



第31海兵遠征部隊

第３海兵遠征軍の有事即応部隊の中で最小ではあるが、最も活発な活動を行うのが、第３１海兵遠征部隊（前方展開）である。約２，２００人の海兵隊員、海軍兵が大佐により率いられる。海軍第１１水陸両用戦隊の艦上(通常、強襲揚陸艦一隻、ドック型揚陸艦一隻、ドック型輸送揚陸艦一隻で構成)に配備されると、この海軍・海兵隊共同チームは、有事対応の最も実行可能な選択肢の一つとなる。これら選択肢には、前方展開部隊の分遣隊としての役割、限られた日数の上陸作戦の実行、より大規模な海兵空陸任務部隊の先遣隊としての役割、様々な危機・緊急事態に対応する海上任務中心の即応能力の提供などが含まれる。

海兵遠征部隊は、航空機の回収、人員の救出、長距離攻撃等、他の部隊では通常行えない任務を行うことが可能。第３１海兵遠征部隊は、１個の増強大隊上陸チーム、大型、中型輸送ヘリ、コブラ攻撃ヘリ、ハリアー攻撃機を擁する航空混成中隊、１個兵站戦闘大隊で構成されている。沖縄のキャンプ・ハンセンに司令部を置く第３１海兵遠征部隊は、米海兵隊で唯一、常時前方展開している遠征部隊である。

【第３１海兵遠征部隊は、米海兵隊で唯一、常時前方展開している遠征部隊である。】

第3海兵師団

【 第３海兵師団は、常時、危機に即応できる態勢にある。 】

第３海兵師団は、第３海兵遠征軍の陸上戦闘部隊であり、少将により率いられる。師団の６，５００人を超える隊員及び海軍兵は、７個の主要隷下部隊に配属されている。キャンプ・コートニーの司令部大隊、キャンプ・ハンセンの第１２連隊、キャンプ・シュワブの第４連隊、第３偵察大隊、戦闘強襲大隊、ハワイ・カネオヘベイの第３連隊である。師団は、米国防省内施設で唯一ジャングル戦に特化したジャングル戦訓練センターを、沖縄のキャンプ・ゴンサルベスで運営している。

第３海兵師団のユニークな点は、部隊配置計画（UDP）への参加である。UDPによって、米本土から沖縄へ６ないし７ヶ月の期間、歩兵大隊、砲兵中隊、軽装甲車中隊、水陸両用強襲車両中隊がローテーション配備されている。

第３海兵師団は、アメリカの国益を脅かす危険、地域の不安定や自然災害に起因する地域内諸国に対する脅威に、常時即応できる態勢にある。第３海兵師団の部隊は、頻繁に太平洋地域に展開し、数多くの訓練・演習に参加。近年では、第３海兵師団は、パキスタン、インドネシア、ソロモン諸島、バングラデシュ、フィリピンにおける人道支援・災害救援活動に参加している。

第３海兵師団は、個人増派や増派部隊を派遣することによって、イラクの自由作戦や、不朽の自由作戦を支援。２００３年以来、両作戦支援のため、１１，５００人の海兵隊員及び海軍兵を派遣している。

第1海兵航空団

航空団の任務は、艦隊海兵軍を支援するため、航空作戦を行なうことである。航空作戦には、攻撃的航空支援、対空戦闘、強襲支援、能動的あるいは受動的電子戦を含む航空偵察任務、航空機やミサイルの管制などが含まれる。付随する役割として、航空団は艦隊司令官の指示により、海軍の航空兵力の構成要素として海軍の機能を果たすこともある。

少将により率いられる第１海兵航空団は、約６，５００人の海兵隊員、海軍兵、約１６０機の航空機を有し、１個固定翼・戦闘攻撃機群（岩国航空基地の第１２海兵航空群）、２個回転翼攻撃・支援群（普天間航空基地の第３６海兵航空群、ハワイ・カネオヘベイ航空基地の第２４海兵航空群）、１個航空司令・管制群（第１８海兵航空管制群）、１個地上航空支援群（第１７海兵航空支援群）で組織されている。

第１海兵航空団の司令部は、在沖海兵隊基地司令部のある、キャンプ・フォスターにおかれている。第１海兵航空団の回転翼機、航空管制、及び地上航空支援装備の大半は、普天間航空基地におかれている。装備内容は、CH-５３E型及びD型、CH-46、AH-１Wコブラ攻撃ヘリ、UH-１Nヘリ、KC-１３０J空中給油機があり、火力と攻撃支援の力強い連携を提供。航空団の他の部隊としては、岩国航空基地に、FA-１８ホーネット機とAV-８Bハリアー機を運用する部隊、ハワイ・カネオヘベイ航空基地に、CH-５３Dヘリを運用する部隊がある。

第１海兵航空団は、部隊配置計画（UDP）の支援を受けている。２個FA-１８中隊、１個電子戦機中隊、１個大型ヘリ中隊、１個軽攻撃ヘリ中隊が、６ヶ月ごとに米本国から日本へローテーション配備されている。

第１海兵航空団は、太平洋地域における軍事作戦及び人道支援活動の両方において多大な貢献をしている。長年にわたり、津波、台風、地滑りその他の被災地支援において主要な役割を果たしている。現在、世界規模のテロとの戦いに大きく貢献し、また、アジア太平洋地域において数多くの訓練や人道支援活動に参加している。

第3海兵兵站群

第３海兵兵站群は、遠征手段、前進基地、世界規模の調達能力を駆使し、第３海兵遠征軍や他の海兵隊統合・連合部隊、連邦機関の求めに応じて、迅速且つ充実した兵站支援を行っている。第３海兵兵站群は海軍と海兵隊で構成するチームであり、西太平洋地域において、充実した兵站支援を完全に遂行する能力を持ち、世界的規模での調達要請に対応する。

第３海兵兵站群は准将によって指揮され、約４，８００人の海兵隊員、海軍兵を有する。司令部はキャンプ・キンザーにあり、隷下部隊には、２個の総合支援連隊(第３５及び第３７兵站戦闘連隊)、１個直接支援連隊（第３兵站戦闘連隊)、第９工兵大隊、第３歯科大隊があり、沖縄、ハワイ、そして日本本土に配置されている。海兵隊司令部は、近代化の一環として、現在及び将来の戦闘所要に更に効率的に対応できるよう、兵站戦闘部隊の変革に取り組んでいる。第３海兵兵站群内部で現在進行している変革で、計画立案と実行を容易にし、任務編成能力と展開力を高めることにより、海兵空陸任務部隊の能力の向上、作戦範囲の拡大に寄与することが可能となる。兵站業務近代化の取り組みは第３海兵兵站群が他に先駆けて行なったため、第３海兵遠征軍は、海兵隊世界規模戦闘支援システムの開発と実施の中心的役割を担っている。

世界規模のテロとの戦い

２００３年以降、沖縄に駐留する第３海兵遠征軍隷下の主な部隊と、在日米海兵隊基地に所属する何千人もの海兵隊員や海軍兵らは、世界規模のテロとの戦いを支援するため、イラク、アフガニスタン、アフリカの角、フィリピンなどに展開してきた。海兵隊員や海軍兵らは個別の増派命令や所属部隊の展開派遣に応え、任務を果たした。毎年、第３海兵遠征軍や在日米海兵隊基地に所属する数百名の人員は、合同個別増派兵力として６ヶ月から１２ヶ月の期間、任務地に配備される。

さらに、第３海兵師団隷下の歩兵大隊は定期的にイラクやアフガニスタンに展開、同様に第１海兵航空団隷下の航空部隊や、諜報部隊、医療部隊、戦闘工兵部隊隷下の小規模分遣隊も同地に派遣されている。

２００６年から２００７年にかけ、第３海兵兵站群隷下の第９工兵支援大隊と第４兵站戦闘大隊の人員、約１、４００人が戦闘後方支援に派遣された。この二つの部隊はイラクの自由作戦を継続支援するローテーション部隊となった。第３海兵師団は、２００６年、アフガニスタンにおける不朽の自由作戦の一環として、アフガニスタン軍を援助するため、同軍内部に組み込まれる訓練チームを派遣する責任を負うこととなった。同訓練チームは２００８年に第３海兵兵站群や第１航空団からも派遣された。アフガニスタン軍内部組み込み訓練チームは１４９人の人員で構成されており、その大部分は士官と上級下士官である。

在日米海兵隊基地

在日米海兵隊基地は、約１，９００人の隊員、５００人の米国民間人職員、４，０００人以上の日本人従業員で構成。沖縄、岩国航空基地、キャンプ富士に基地を置く。在日米海兵隊基地の任務は、施設、訓練、兵站支援、正規学校教育の提供や、在日の第３海兵遠征軍とその主要部隊への管理業務の一部の提供である。提供される訓練や派遣支援のおかげで、各部隊は即応性を維持し、日米相互防衛条約を支援することができる。

包括的かつ現実的訓練は、戦闘即応性を維持する上で重要な要素としてみなされてきた。在日米海兵隊基地の複合訓練施設群は、最新の技術を保有し、バーチャル、実弾両方の訓練を提供可能。総合的な射場群、ターゲット・システムやシミュレーター等は、第３海兵遠征軍隊員の優秀な基本戦闘技術の維持に貢献している。

実際の作戦への参加であれ、演習への参加であれ、在日米海兵隊基地は、展開前から、展開中、展開後までに渡り、部隊を支援している。また、各種重要な輸送、管理業務、兵站支援を在日の部隊に提供している。

アジアにおける米軍最大の訓練場を運営し、展開部隊を支援しつつ、在日米海兵隊基地は、自然保護、文化財保護に関する原則を日常の活動に全面的に適用している。在日米海兵隊基地は、部隊運用の即応性を維持しながら、受章に輝いた環境保護プログラムを通じて、環境関係法令、規則等の遵守に尽力している。

周辺地域、地元や中央の政府機関との効果的な計画と綿密な調整は、海兵隊員や海軍兵らに最新の訓練場や施設へのアクセスを可能にしている。このパートナー関係は、太平洋地域の安定を支えるための協調的取り組みにつながるものでもある。在日米海兵隊基地と周辺地域は、数多くの分野において利益を共有しており、お互いに協力して計画し、長期的で、双方にとって利益となる強力なパートナーシップを形成することが極めて重要である。この継続発展する関係は、地域との交流活動となって示されている。

地域交流活動

我々海兵隊員は、ただ単に日本に派遣されてきているだけではない。地域の一員として日本に住み、働き、家族を育てている。我々は同盟国であると同時に、もっと重要なことに、よき隣人同士であり、その良い関係を維持したいと願っている。地域のリーダーや人々との交流を通じ、海兵隊員や海軍兵らは日本の文化や多様性をより深く理解していく。

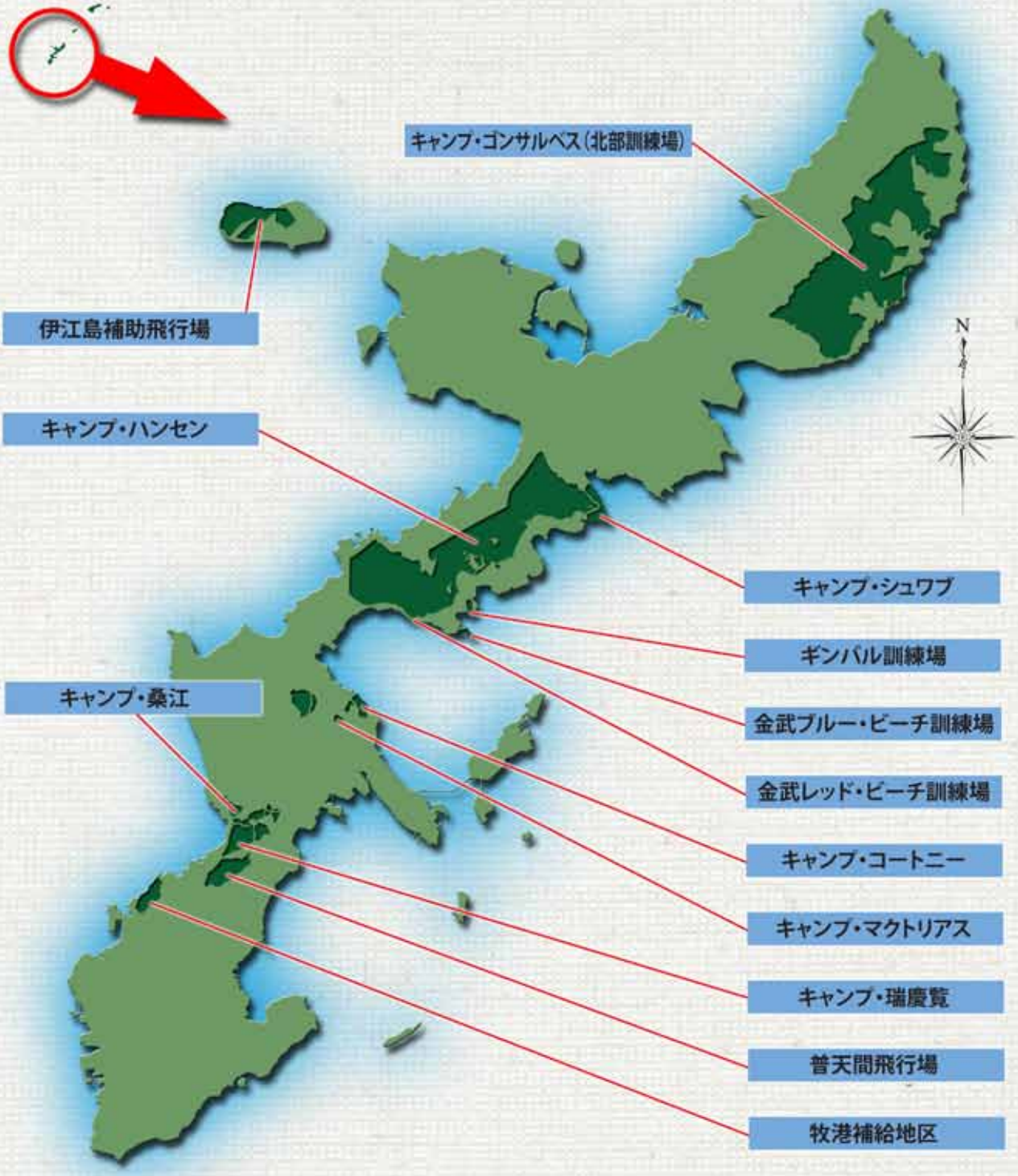
任務で来日する全ての海兵隊員は、沖縄や日本社会の文化面の教育を目的とする包括的なオリエンテーション・プログラムに参加することを義務付けられている。

在日の海兵隊員は、祭り、スポーツ行事、ビーチの清掃、音楽祭など、年間延べ１，５００回以上に上る地域との交流行事に参加している。沖縄の小学校で行なわれているボランティア英語教育プログラムは、その中でも最も人気のある地域交流活動の一つである。

我々には、地域に貢献するという伝統がある。米軍関係のプライベートな団体も、年間を通し、数多くの慈善事業を行なっている。例えば、アメリカ婦人福祉協会は、過去十年にわたり、軍人の夫人らで運営するギフトショップの売り上げで得られた利益、２百万ドルを地元沖縄の慈善事業に寄付している。

【ボランティア英語教育プログラムは、最も人気のある地域交流活動の一つである。】

在日米海兵隊基地は、地理的に分散した１２の施設で構成されている:
キャンプ・シュワブ、キャンプ・ハンセン、キャンプ・コートニー、キャンプ・マクトリアス、キャンプ・フォスター、キャンプ・レスター、キャンプ・キンザー、キャンプ・富士、普天間及び岩国航空基地と２つの訓練施設、キャンプ・ゴンサルベス（ジャングル戦訓練センター）、伊江島補助飛行場。日本本土にあるキャンプ・富士と岩国航空基地を除き、他の全ての基地は沖縄にある。



第３海兵遠征軍/在日米海兵隊基地
指揮系統

発行（2008年7月、英語版）：
在日米海兵隊報道部

翻訳：
在沖米海兵隊バトラー基地
外交政策部

印刷：
COMBAT CAMERA CENTER GRAPHICS DEPT.